

台北・国立故宮博物院を訪ねて

昨年秋、故宮博物院は60周年を迎え、それを記念して、盛大な展覧会が北京と台北の双方の故宮博物院で開かれました。このうち、台北の展覧会を見る機会に恵まれましたので、簡単な報告をこの紙面を借りてさせていただきます。

まず最初に、故宮博物院の沿革をなぞり、現在故宮博物院と名乗る博物館が二つある理由を説明しましょう。

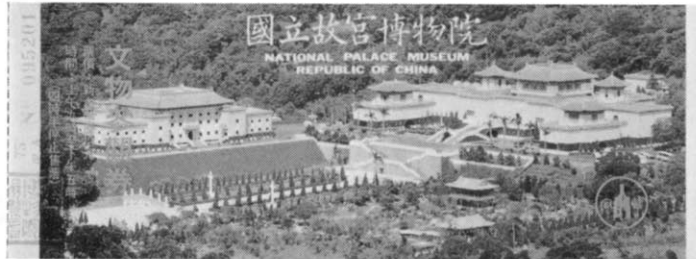
1912年、中華民国が発足し、清朝は滅びました。しかし、宣統帝傳儀は依然として紫禁城内廷に留まり、皇室の財宝は直ちに民国に移管されたわけではありませんでした。つまり北京の宮殿の後宮だけは清時代のままだったのです。

こうした変則的な状態は十年余り続きましたが、1924年に宣統帝に対して出宮の命令が下されました。これによって故宮全域と清朝皇室の財宝は民国政府の管理するところになったのです。

宣統帝退位後、弁理清室善後委員会が直ちに結成され、内廷内の古文物の調査が開始されました。そして、翌民国14年(1925)の双十節(十月十日、辛亥革命記念日)に、故宮博物院は誕生しました。

こうして、明清二代の王朝の宮殿とその財宝という、中国文化遺産の粋が、一般の人々の眼に触れるようになったのです。

国立故宮博物院入館券



しかし、日本の中国への侵攻が始まり、戦火を避けるために、重要な文物は箱詰めされ南方へ移送されました。1933年の事でした。そしてこれらの物の主要部分は二度と北京に帰らず、1948年には国民党政府によって台湾に運ばれたのです。

こうして、政治的に二つの中国が生まれるとともに、故宮博物院も二つに別れ、現在に至っています。

さてこの台湾へ運ばれた文物は、初め台中市に置かれ、1957年より一般公開され、1961年から62年にかけて米国の五都市で特別展覧が行なわれました。故宮の文物が海外出陳されたのは、1935年から翌年にかけて開催されたロンドン中国美術国際展以来のことでしたが、大陸側から返還要求が出されるなどのことがあり、それ以来、海外での展覧会は行なわれていません。それゆえ、故宮博物院の最優品をまとめて見るには、今回のような記念展以外に機会はありません。

ところで、日本で最近行なわれている故宮博物院展は、皆北京の方のものですが、書画に限って言えば、元朝以前の作品は海外出陳が規制されているらしく、日本で見ることはできません。

それはさておき、台中市の施設は一時的なもので、1965年11月12日に、現在の国立故宮博物院が台北市郊外の外双溪に開館し、収蔵

品も移されました。

建物は、北京紫禁城をまねた、鉄筋コンクリート造りの四階建てで、近年、事務研究棟が増築され、展示場が拡大されました(入館券の写真参照、右手が展示場本館)。3階まで各階10室程の展示室があり、4階の樓閣を思わせる部屋には北京故宮の三希堂が復元してあり、喫茶部もあります。またこれに隣接する左右の小樓も喫茶室です。

60周年のために内装も一新されて、展示場、各階にある売店も立派で、快適な条件で参観することができました。入館料は30元(日本円約180円)で、開館時間は9時から午後5時までで、定休日はないようでした。携帯用の椅子を持参して、6日間、朝から夕方まで絵画を中心に見ましたが、黄公望の富春山居図巻や范寬の谿山行旅図といった名品が数多く出陳されており、時の経つのも忘れて見入りました。(藤田伸也)